

退職記念講演 自我同一性内容別尺度の研究小史

榎 木 満 生*¹

皆様、心理学研究所会議にお集まりいただきまして有難うございます。本日 (2001年1月28日・水曜日)、私は、専門分野の自我同一性の内容別尺度の研究史についてお話ししたいと思います。

1. エリクソンの自我同一性の発見

話の発端はエリクソン (E. H. Erikson) から始めたいと存じます。エリクソンという方は、1902年ドイツのフランクフルトのユダヤ人の家系に生まれました。父親はエリクソンが母親の胎内にいるときに失踪してしまいました。そこで母親はエリクソンが3歳のときに再婚をしています。子ども時代にはドイツでしたから、ユダヤ人の家系ということで周囲から筆舌に尽くせぬ苦しみを味わったそうです。大学を中退し、若い時代は画家を志してヨーロッパ中を旅しました。時には、橋の下で寝たこともあるということですから、よっぽどお金に窮した旅行をしていたのだらうと思います。しかし、この自由な青春時代が彼を創造性の高い人格につくり上げ、後の「自我同一性」学説の基盤をつくりました。

たまたま彼が25歳のとき、後で精神分析家になるブロス (Blos, P) と知り合い、その縁でアンナ・フロイト (Freud, A.) に紹介されました。アンナ・フロイトの実験学校でお手伝いをしているうちに、美術の先生になったという経過があります。第2次世界大戦直前の話で普通のドイツ人にとっても大変難儀をしている時代でしたが、ユダヤ人たちにとってはナチスドイツの迫害が大きな問題になりました。それを逃れるためにエリクソンはアメリカのボストンへ移住することになりました。このことは逆に彼にとっては、大変な幸運に恵まれました。というのは、エリクソンはフロイト関係者ということで、いきなりハーバード大学医学部で児童精神分析学講座に就職することができたからです。そして、そのころのハーバード大学には、後に有名になる大勢の心理学者や文化人類学者がいました。例えばTAT検査のマレー (Murry, H. A.) やグループダイナミックスのレヴィン (Lewin, K.) さらに、文化人類学者のマーガレット・ミード (Mead, M) (南太平洋サモア島にて男女の性役割の調査) やベイトソン (Bateson, G.) (家族療法の創始者の1人) やベネディクト (Benedict, R.) (日本文化は恥を中心とした外的強制力によって行われるとした。「菊と刀」を執筆) との知り合い、そのような人達との語らいの中でエリクソンは自分の学説を構成していきました。とにかく20世紀の前期を代表する心理学者や文化人類学者が当時のハーバード大学にそろっていたことが彼には大いなる刺激になりました。そのような雰囲気の中で、彼はその人達の心理学や文化人類学の方法論を使い始めました。彼は、今までヨーロッパを放浪してきたあちこちの国々を旅して見た文化を基に、生涯発達と自我同一性に関する論文を一気

* 1 立正大学心理学部

に彼が書き上げました。実際には1951年と1959年の2つの著書が出ています。その中で彼は青年期には自由に開放されて広い視野から世間を見ることが、やがては大人になり就職して社会の仕組みの中で生きるときの自分の役割の自覚と覚悟を決めることになるのだと説明したのです。このことを青年期の自我同一性 (ego identity) だと説明しました。

2. 自我同一性の尺度研究への発展

(1) エリクソンの自我同一性の尺度化

青年期は広く世間を見ることを通して、自我同一性を確立させ、それがやがて次の成人前期の結婚や就職といった人生の岐路に立ったときのよりどころになるという漸成発達説 (epigenesis) を展開しました。そして、そうした論文の書き方は文化人類学からもらった手法、今の言葉で言えば物語 (ナラティブ) 的な手法を用いています。そこでエリクソンは、そこに書きましたステージ I からステージ VIII までの順番に、人生を生涯発達という観点で整理しました。

Table 1 エリクソンの自我同一性について

ステージ	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
一般名称	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人中期	老年期 (成人後期)
心理社会的 危機	信頼感 対 不信感	自律性 対 恥・疑惑	自発性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	同一性 対 同一性拡散	親密性 対 孤立	世代性(生殖性) 対 自己陶醉	統合性 対 絶望

これは、今の生涯発達心理学の出発点を作るものでして、ご存知の方も多いでしょうし、どの心理学の教科書にも載っているものです (ただ一部の訳語の表現は、まだ訳者によって定訳になっていない)。

こうなると次は、当然こういう心理学の学説ができれば、それを実証的に裏付けようという話が出てくるわけです。エリクソンは文化人類学の手法で、アイデアを出しましたが、それを実証的に何か数字で示す方法はないのかということです。そこで、2人の研究者が尺度作成を試みております。一人はラスムッセン (Rasmussen, J.E. (1964))、こちらは1961年ですから、エリクソンの本が出てすぐに作成しました。もう一人はローゼンタール (Rosenthal, D.A. (1981))、こちらは20年後の1981年に尺度を作成しました。

Table 2 ラスムッセン尺度とローゼンタール尺度の相関分析

		ラスムッセンの発達段階尺度					
		信頼性	自律性	自主性	勤勉性	同一性	親密性
ローゼン タール 尺度	信頼性	.65**	.31**	.41**	.46**	.59**	.30**
	自律性	.43**	.66**	.43**	.63**	.54**	.44**
	自主性	.49**	.54**	.65**	.63**	.57**	.37**
	勤勉性	.51**	.53**	.51**	.76**	.66**	.43**
	同一性	.52**	.53**	.51**	.52**	.68**	.67**
	親密性	.42**	.53**	.54**	.64**	.75**	.65**
	生殖性	.42**	.40**	.52**	.56**	.57**	.55**
	統合性	.41**	.43**	.54**	.61**	.66**	.45**

どちらも日本語に翻訳されていますので、私はその二つの尺度を追試してみました。で、2つの尺度の各因子の相関係数を見ていきますと、ちょうど対角線上に四角い枠に囲まれた数字が大体0.6くらいで続いています。例えば、ラスムッセンの自律性尺度とローゼンタールの自律性尺度は理想的に言えば1にできるのがよいはずですが、もちろん実際のデータはそのようなことにはならず、1でなくちゃいけないものが、測定値では大体0.6位で出ているのだということがわかります。で、この中で問題は、ラスムッセンの方の同一性と、ローゼンタールの同一性の相関係数が、0.68になっています。それよりはその次、ラスムッセンの方の同一性と、ローゼンタールの親密性のほうが0.75になっており、私は非常に面白いとおもいました。つまり、どちらかという、ラスムッセンの方で同一性と言っているものは、どうも、ローゼンタールの方は、親密性のほうが近い関係にあるのだということがわかってくるからです。

(2) おそくなった青年期の発達

ここには臨床心理学の先生の方が大勢いますけども、臨床家は、臨床現場はあってそこで毎日実践を行っています。どうしても臨床実践は個別のケース研究であり、実証的な研究につなげるのが難しいという苦労があります。そのため私は、片方で自我同一性の研究を実証的なものやっけて、もう片方では、臨床的な例えば家族療法とか、マイクロカウンセリングとかやっけています。時に青年期の事例が来ると自我同一性の実証的な裏づけを取り、そのアイデアを基にして自我同一性の論文を書くという、2重構造をやっけてきたのです。

Table 3 生涯発達心理学の第1版と第2版の発達段階の差異

	10歳 児童期	12歳 青年前期	15歳 青年中期	18歳 青年後期	22歳
75年	ギャング エイジ	個人的同一性		職業的同一性	
		性役割同一性 (同一性が拡散か)		社会的同一性	
84年		12歳 集団的同一性	15歳	18歳 個人的同一性 性役割同一性	22歳 職業的同一性 社会的同一性
					30歳

その自我同一性の中でも、青年期を重点的にやり始めたわけであり、私は長いこと学生相談室で相談活動に従事しておりましたので、青年を対象にしたカウンセリングをやっけていました。だから、青年期が、私の研究対象になるわけであり、エリクソンの学説の展開につきまちは、バーバラ・ニューマン、それからフィリップ・ニューマンという2人の方が「Development through life」という本を書きました。日本語では、「生涯発達心理学」という名前が出ています。これを読んでいて、その初版の75年版と、第2版の84年版で、一部中身が変わっているということに気がきました。75年版と84年版では、青年期について書かれた内容が変わっているのです。私は最初、75年版を持っていてこれを基に自我同一性の論文を書いていたのです。しかし、何しろ私は単身赴任をしておりました東京で月曜から金曜まで勤務して、土曜日と日曜日は宇都宮に帰る生活をしていました。分厚い本をカバンに入れてもっ

て歩くわけには行かなくて、両方に1冊ずつ必要になりました。それで、75年度の初版本を家におき、そして東京に一冊、新しい「生涯発達心理学」の本を買いました。それが84年度の第2版だったわけです。最初、同じ本のつもりで読んでいましたが、やがて中身が違うことに気がつきました。そこで詳細に比較始めてみました。そうしてみると75年度版では、児童後期のギャングエイジという記述が非常に詳細に書いてありまして、そして、12歳から青年期に入るとそこですぐに個人的同一性の獲得が始まるように書いてあります。それが84年度版になるとギャングエイジの記述が簡単になり、代わりに集団的同一性の記述が見られております。

個人的同一性というのは何かといいますと、要するに自分はこの家族の中で生まれた。そのことがきちりと自分の中で自覚し、受け入れているかということです。自分は、この家の父親と母親の2人のもとに生まれた。さらには長男であり、次男である。そういうものがきちんと気持ちの中で了解できているかどうかというのが、個人的同一性であります。これに対して性役割同一性というのは、自分は男性だったら男性としての自覚、女性だったら女性としての自覚を持っていて、日常生活の中で適切な性役割を演じることができるかというものであります。普通この個人的同一性と性役割同一性は中学生、高校生の時期に危機がやってきます。これに対して18歳を過ぎる頃から、次の新たな職業的同一性、社会的同一性というものを求めるようになります。職業的同一性というものは、自分はどのような職業が向いているか、適職は何かというものです。一方社会的同一性というものは、自分が入っていく社会、例えば地方に住むか東京に住むか、どういう仲間と付き合うか、インテリ階層と付き合うのか、それともスポーツマンと付き合うのがいいのか、そういうのが全部社会的同一性の分類に入ります。初版本ではこの4つの同一性を青年期には問題にしています。それをまとめて自我同一性にしていました。それが84年版を見ますと、ギャングエイジの説明が少なくなっています。全部なくなったわけではないですが、かなり短くなっております。そして、そのかわりに12歳の頃、集団的同一性の獲得というという新たな危機が出てきています。それから後、個人的同一性、性役割同一性は大体高校生ぐらいにちょっとずれ込んでいる。そして、20代前半頃、ようやく職業的同一性、社会的同一性を獲得しなければいけないという記述が辺りでできます。そういうわけで青年期が長くなり、発達課題が増えているのです。新たな「集団的同一性」という青年期の課題が加わってきているのです。これは何故こうなったのか考えてみますと、アメリカでも青少年の発達が遅くなってきていることがわかるわけです。つまり、日本同様にギャングエイジがアメリカでもなくなってきている。私はギャングエイジが日本でなくなっているのは、ずいぶん前から気がついていくつかの論文でそのことを指摘していますが、アメリカもギャングエイジがなくなったのだなと思いました。ギャングエイジがなくなった分、発達が後ろへ順送りされてきているということです。そうして見ていくと、この状況は日本の現状の青少年を見るにも、非常に良く当てはまります。この考え方が、アメリカの生涯発達論の教科書に採用されているのです。

(3) 内容別自我同一性の尺度化

これらの研究は、ほとんど実証的研究ではなくて、文化人類学的手法を用いたナラティブ的なインタビューから出てきた結果なのです。しかしどうせ研究するのでしたら、これをもう少し科学的根拠をもった実証的研究で裏付けられないかというのが、私の研究の発端であります。

これを論文として書いたのが、2003年に「内容別自我同一性尺度についての研究」です。これは私、

Table 4 自我同一性内容別下位同一性尺度のための因子分析

質問項目	I	II	III	IV	V	共通性
6 なぜこの家の子どもなのか悩んだことがある	.61	.13	.21	.19	.12	.48
15 自分らしい生き方を見出そうと悩んだことがある	.58	.18	.20	.17	.10	.42
19 親、兄弟と自分の人生の違いを悩んだことがある	.54	.17	.28	.15	.15	.53
5 生涯を通して自分のしたいことを悩んだことがある	.46	.10	.14	.18	.31	.40
2 自分はなぜここにいるのかを真剣に悩んだことがある	.41	.18	.18	.08	.32	.54
11 自分は誰にも理解されていないと悩んだことがある	.41	.23	.40	.32	.23	.46
1 自分の性（男性、女性）が気になったことがある	.29	.70	.10	.26	.23	.63
20 自分の性としての服装・動作を気にしたことがある	.32	.61	.16	.25	.19	.58
9 自分の性の生き方を考えて悩んだことがある	.15	.58	.24	.13	.11	.45
21 自分の容貌や体型が気になったことがある	.14	.56	.15	.29	.16	.52
14 よくグループ仲間でまとまって遊んだことがある	.26	.09	.65	.04	.14	.48
3 グループ内の自分の評判が気になった事がある	.11	.20	.64	.15	.27	.47
13 仲間の約束を親の意見より優先したことがある	.25	.35	.55	.13	.16	.52
8 仲間を通して多くの生き方を学んだと思う	.26	.27	.53	.02	.21	.44
4 自分の得意とする仕事について考えたことがある	.15	.22	.21	.56	.25	.51
23 将来どの職業に進みたいかを考えたことがある	.29	.03	.26	.53	.28	.44
17 自分はどんな仕事に向か考えたことがある	.26	.27	.13	.51	.21	.42
10 能力や家庭環境から進路について考えたことがある	.17	.15	.10	.48	.20	.49
22 大人になってどの社会に入りたいかを考えたことがある	.12	.21	.22	.13	.49	.51
18 大人になったらどこに住みたいかを考えたことがある	.18	.03	.33	.13	.44	.44
16 将来どんな社会的立場になりたいかを考えたことがある	.18	.16	.34	.13	.42	.45
12 将来自分が所属したい社会について考えたことがある	.24	.18	.30	.21	.42	.42
7 将来付き合いたい仲間について考えたことがある	.22	.40	.43	.31	.41	.41
質問7、11を除いた因子の寄与率	10.21	9.14	8.81	8.51	7.13	
因子の累積寄与率	10.21	19.35	28.16	36.67	43.80	

主因子法 バリマックス回転

平成13年の心理学部ができる前に1年間だけ文学部に所属しておりましたので、そのときに文学部論叢へ書かせていただいたものです。その時に、内容別自我同一性尺度というものを作りました。そしてその次、今度はこちらの心理学部に移ってから、心理学部研究紀要の中でも、続きの論文を書かせていただきました。

3. 自我同一性の内容別尺度項目

そのような中で、この自我同一性を内容別に尺度化してみたわけでありまして、そこで作られたのが、Table 4にある尺度です。「何故この家の子どもなのか悩んだことがある」「自分らしい生き方を見出そうと悩んだことがある」「親兄弟と自分の人生の違いを悩んだことがある」「生涯を通して自分のしたいことを悩んだことがある」「自分がなぜここにいるかを真剣に悩んだことがある」といった記述をつくりました。これに因子分析をかけますと、きれいに5つの因子が出てきます。第一因子は、個

人的同一性、第二因子は、性役割同一性、第三因子は、これがもっと前に出る集団的同一性であります。第四因子は、仕事の問題で有りますから、職業的同一性であり、第五因子は社会的同一性となります。こういう風にして、5つの因子を持つ尺度を用いて、実証的な裏づけが出来ないかと思って研究を始めました。

4. 研究論文を読むときの姿勢

ところが、平成14年以降、私は学部長になりまして、やっぱり猛烈に忙しくなり、とても自分では継続的に体系だった研究はできないことがわかりました。そこで、これは私の持論で、日ごろから学生に言っていることですが、「私の論文を批判的に観察せよ (critical thinking)」ということをお願いしました。「俺の研究をとにかく追試してみてくれ。そのかわり、それは主任教授の研究だと思ふな。そうではなくて、批判的に観察せよ」と言ってみました。これは私はアメリカの大学院へ行きました時に、最初の授業で面食らったことがあります。それは、「論文はまともに読むな。論文を読む時には、これはまだどこがおかしいぞと、どこかに間違っていて改善するところがあるはずだ」という気持ちで読まなければいけないと学んだのです。「必ず論文は批判し、改善する箇所を見出せ」と、こういう風に私は大学教授から教え込まれました。これは、現在私が、大学学部ゼミや大学院授業で学生に科学的論文を読ませるときの基本的姿勢になっています。私も修士とかゼミの学生の授業では最初にこのクリティカル・シンキングの概念を伝えます。

私は論文を追試するときには、「以前の論文と同じの結果が出ました」と、そういう論文は書くなど言っています。私の論文をいつでも批判して、私の論文を乗り越えて行けと授業で教えます。

そういう時、必ず、フロイトの話をしします。フロイトは、プロイエルから催眠浄化法を教えてもらいましたけれども、やがて、プロイエルはO・アンナに追い掛けられ、ウィーンを去らなければならなくなります。二人で始められた催眠浄化法ですが、結局はフロイトが中心になっていった。そこに夢分析の独自の発想が加わり、1900年頃にはフロイトの精神分析学へと発展していくわけです。ですが、やがて彼の理論は1910年頃、アドラーやユングによって批判されますが、結局はフロイトのもとを彼等は去ることになります。それから後、1920年代になりますと、最も忠実な弟子であったフレンツイ、それからオットー・ランクも、新しい着想を基に論文を書きました。フロイトはやはり気に入らなくて彼らを追い出してしまいます。フロイトは自分以外の学説をすべて異端と決め付けて排除したのです。私は、そういう例を次々と話をして、学生や院生に言います。僕は、そういう頑迷な教師の二の舞を踏むつもりはない。とにかく、いつの時代でも、弟子の論文というのは、その師匠の業績を乗り越えていくつもりにならなければ書けないのだから、そのつもりで書けと、そのように最初の授業で説明しています。

5. 新尺度への院生、学生による新たな追試

(1) 高山晴美による追試

私の研究を批判的に追試して発展させてくれた院生で高山晴美さんがおります。彼女は修士課程の院生です。高山さんは、勉強をするうちに新しい着想法を見つけました。彼女は自我同一性尺度の調査項目を、過去の危機と、現在の自己投入とを分けた方がいいと考えました。つまり、「過去に悩んだことがありますか」(過去の危機)ということと、「現在何かに自己投入(傾倒)しているものがありますか」

(現在の自己投入)、ということを別々に聞くことにしたわけでありませう。

高山さんは、「過去の危機」だけで60項目、「現在の自己投入」だけで60項目と、合計120項目の大きな質問紙に作り変えました。これだけ、大きくなると、回答するのに時間もかかります。これを被検者に回答してもらい、因子分析にかけて分離できるかと思ったら、大変大規模な調査になります。実際にこの尺度をもちいて因子分析をしてみますと、過去の危機のほうは、職業的同一性、集団的同一性、社会的同一性、個人的同一性、性役割同一性となり、楡木の分類と全く同じになります。バーバラ・ニューマンらと、同じ項目が因子で出てきたと、ということになりました。で、その次ですが、現在の自己投入の方も60項目を分類しましたら、個人的同一性、集団的同一性、職業的同一性、性役割同一性とは大きく分かれたのですが、ここで一つ大きな問題が生じました。どうも性役割同一性と社会的同一性が、うまく分離できないのです。それで、よく質問項目を読みながら、考えていきました。何でこのところがうまく分離できないんだろうかと考えたときに、被験者の問題に気がつきました。私たちの大学生を対象にしてアンケート調査をおこなっております。その場合に、大学生には、社会的同一性を調査することの意味が良くわかっていないんじゃないかと、たとえば大学のときにですね、「あなた将来何処に住みたいですかと聞かれてもまだ未発達の場合には応えようがないのではないかと。あなた人生を過ごすのに、例えばどういうインテリの人と付き合うのが良いか、それとも芸能人と付き合うのが良いかと問われたって、まだピンと来ないんじゃないかと気がついたのです。言い換えると、これは大学生を研究対象とする場合、社会的同一性というものを尋ねるのにはちょっと無理があったのではないかと、ということが考えられた訳です。この問題がありますが、他の項目はきれいに分離できています。高山さんが、この研究をやってくれたおかげで、大体自我同一性の内容別尺度の研究は出来上がったと実は安心してました。

(2) 平山恭弘による追試

ところが、その次に平山恭弘君という修士の学生さんが、高山さんの研究をさらに追試しました。彼は「高山さんのやった研究を、さらに追試して見たい」といったので、どうぞやってくださいと私も言いました。ところが、それがどうもうまく行かなくなってしまいました。まったく、平山論文では、高山さんと質問項目の文章が同じでなく、平山さんの質問項目の語尾は「悩んだ」ことがあるかどうかにして、「悩みの有無」を確かめています。36ページに入れたのが、その結果が入れてあります。その結果を見ますと、わかると思いますが、個人的同一性、集団的同一性、社会的同一性が、統合されて一つの因子になり、それから、職業的同一性、性役割同一性は分離できました。これには私も考えてしまいました。何で個人的同一性、集団的同一性、社会的同一性は分離できないんだろうと...個人的、集団的、社会的が完全に混じって分離できないのであろうと.....これが、2007年の修士の学位論文ですね。平山君の論文の中心は性役割の研究だったので、別に支障はなかったのですが、しかし、私や高山さんの因子分析の結果と比較して見ますと、ここで何故、個人的、集団的、社会的が分離できないのだろうと、疑問が生じてしまいました。

(3) その後の追試

それで、この結果を2008年の4年の卒業論文の計画を練り始める4月にこのような話をしまして、こ

Table 5 青年期版自我同一性尺度の作成 (平上, 2007)

	I	II	III	共通性	IT相関	Mean	SD
自分の性格について悩む	.78	-.05	-.02	.55	.71	3.41	1.30
他者からの評価に悩む	.76	-.11	-.10	.48	.64	3.36	1.31
他者と考え方が違って悩む	.71	-.05	-.11	.45	.64	2.87	1.37
グループでいるとき、自分の役割について悩む	.70	-.01	-.06	.47	.65	2.87	1.29
自分は孤独だと感じて悩む	.70	.06	.10	.57	.73	2.78	1.33
自分の居場所がないと感じて悩む	.68	-.05	.11	.48	.67	2.51	1.42
自分と他者を比較することで悩む	.64	-.01	.04	.45	.64	3.38	1.28
あるがままの自分でいいか悩む	.66	.08	-.06	.47	.65	2.87	1.36
グループでいると、どう振舞ってよいか悩む	.66	-.03	.04	.43	.64	2.84	1.35
仲間との人間関係について悩む	.65	.01	-.07	.42	.62	3.17	1.29
他者を信頼できないことについて悩む	.64	-.02	.14	.47	.65	2.84	1.44
他者との価値観の違いについて悩む	.62	.01	-.07	.37	.58	2.97	1.31
他者との信頼関係について悩む	.60	.06	.16	.47	.63	3.23	1.28
他者に振り回されることに悩む	.59	-.10	.10	.35	.53	2.74	1.36
自分の生き方に自信が持てなくて悩む	.59	.27	-.04	.56	.69	2.86	1.42
異性への接し方について悩む	.57	-.11	.04	.30	.53	3.07	1.34
自分の個性とは何だろうと悩む	.53	.15	-.15	.36	.54	2.93	1.32
初対面の人に対してどう接していいか悩む	.50	-.11	-.15	.19	.41	3.14	1.42
自分の行動が受身的であることに悩む	.49	.09	-.15	.28	.49	2.97	1.42
友人の数が少ないことで悩む	.47	.06	.02	.26	.49	2.08	1.30
なぜ自分がこの家に生まれたのか悩む	.45	-.08	.17	.25	.46	2.16	1.37
自分が何のために生まれてきたのか悩む	.45	.00	.17	.27	.48	2.58	1.37
自分の容姿や体形について悩む	.45	.15	-.11	.27	.46	3.65	1.34
自分が積極的に行動できないことに悩む	.44	.06	-.20	.22	.41	3.31	1.35
他者と接するとき、自分が演技をしながら接している気がして悩む	.44	.06	.15	.28	.49	2.73	1.38
家族内の人間関係で悩む	.43	-.07	.14	.22	.42	2.60	1.48
将来本当にやってみたい仕事に分からなくて悩む	.02	.83	-.03	.71	.66	3.30	1.51
将来つきたい仕事の内容がよくわからないため悩む	.00	.83	-.07	.70	.64	3.46	1.40
将来、どんな仕事に就こうか悩む	-.18	.80	.12	.53	.41	4.23	1.04
自分がどの仕事に向いているのか悩む	.00	.72	.07	.51	.72	3.94	1.13
将来の仕事の選択肢が複数あるため悩む	.02	.42	-.02	.19	.72	3.14	1.43
自分が男(女)であることに悩む	-.01	.00	.80	.64	.66	1.57	1.06
自分の性(男性・女性)について悩む	.00	.06	.75	.56	.59	1.89	1.25
自分の行動が自分の性(男性・女性)と一致していないように感じて悩む	.06	-.03	.46	.23	.53	1.56	.95
恋愛対象が自分と同性であることについて悩む	-.19	-.01	.41	.17	.25	1.27	.80
男らしさ、女らしさについて考え込む	.24	.09	.40	.29	.41	2.21	1.28

主因子法 プロマックス回転

の辺研究してみると面白いよと言っておきました。するとこの1月(2009年)に論文提出した中で、6名の方が内容別自我同一性関連の研究を行いました。それぞれに別の角度から自我同一性を研究したのですが、4年生は卒業論文の内容に合わせて自分たちの研究目的に合うように少しずつ文章を作り変えているために、どうもそれで統一が取れないところがあります。皆、自分の研究目的にも合うように、自我同一性の質問項目を少し変更しているのです。特に語尾の問題は、男性と女性で訊き方がいろいろと変わります。4年生の小澤君は男性ですが、被服に興味があり、卒論のテーマにしました。その被服に関心がある、服装で個性を出そうとしてこだわっている人というのは、自我同一性というのが関係していて、自我同一性がしっかりした人が、服装も特徴ある服装をするんだと、そういう仮説を立てました。それから結城君という学生は、自我同一性の中の職業的同一性を「将来」と名づけました。それから、集団的同一性を「友達との連帯意識」とそう名づけたんです。これらが自己肯定感と大変関連があるんだという結論を出しています。それから、石橋君は「人生のキャリア観」と取り組んでおりまして、「人生を充実させるための努力」は、自我同一性の確立と大変関係していると結論を出しています。それから、泉さんは中年の女性ですのでご存知の方もいると思いますが、レジリエンス、これと自我同一性とストレスコーピングとの関係を調査しました。レジリエンスという言葉の意味は、色々な困難な出来事に出会ってその障害を克服して勝ち残る人の生き残る性格ですけども、その性格は何に関係しているかと調べると、肯定的未来志向、それから新規性追及、それから、感情調整、忍耐力、こういうものがひとつにまとまってレジリエンスというのは出来ていると結論づけて、このレジリエンスは、自我同一性と正の相関を持っているということも明らかにしました。それから、井上香菜子さんは、これは高山さんの質問項目をそのまま用いて追試しましたら、高山さんと同じ結果にたどり着きました。この方は大学生の居場所の問題に関心がありまして、大学生の居場所と自我同一性の関係を調べてみて、個人的同一性と居場所の中の内的要因は0.7の高い相関を持っているというのを導きました。個人的同一性を獲得するために、やっぱり居場所の問題というのは重要なかなと、私も考えさせられました。それからその後、小野寺亜紀さんの論文ですけども、これは、精神的健康観の尺度を使いまして、被害関係念慮は職業的同一性と結びついている。それから、精神身体的訴えというのも、これも職業的同一性と結びついている。とこんな結論を出してきました。不思議なことに、上3人は男性で、下3人は女性ですが、上3人は、自我同一性尺度の質問項目を少し作り変えたということもあるんですが、いずれもあまり自我同一性の解釈の枠組みには分類できるように出てこない。つまり、いくつかの内容別同一性が融合してしまっております。これに対して、下3人は皆女性なんですが、女性の方の研究は高山さんの尺度と同じようにほとんどうまく分離した結果が出ています。

研究者の性がどうして結果と関連しているのかと考えて見ますとよくわからないのですが、偶然の一致の可能性も高いのかもしれませんが、質問の語尾をとりかえるのは、男性と女性で、少しニュアンスが違うのかも知れません。それが、結果に反映されて出てくるのかも知れません。現在ではそんな結果が出ています。私の研究はここまでで、定年退職でいなくなるものですから、こんな風な研究が今のところ進んでいますよと、皆さんの前で発表して、誰か興味がある人がいたら、引き取ってやっていただくと幸いです。どうぞ、宜しく願いいたします。

Table 6 自我同一性尺度

	将来展望	自己存在	連帯意識
将来自分が所属したい社会について考えたことがある	.83	-.01	.14
大人になってどの社会に入りたいか考えたことがある	.68	.12	.28
将来どんな社会的立場になりたいか考えたことがある	.60	.05	.04
将来どの職業に進みたいかを考えたことがある	.55	.11	.03
大人になったらどこに住みたいかを考えたことがある	.54	.12	-.03
能力や家族環境から進路を考えたことがある	.50	.22	.15
自分の性の生き方を考えて悩んだことがある	.12	.68	-.27
自分の性（男性、女性）が気になったことがある	-.04	.59	-.26
自分らしい生き方を見出そうと悩んだことがある	.27	.55	.31
自分の性としての服装・動作を気にしたことがある	.14	.46	-.04
生涯を通して自分のしたいことを悩んだことがある	.25	.44	.25
なぜこの家の子どものなか悩んだことがある	.01	.42	.15
親、兄弟と自分の人生の違いを悩んだことがある	.05	.38	.16
仲間を通して多くの生き方を学んだと思う	.25	-.06	.51
仲間の約束を親の意見より優先したことがある	.10	.03	.45
グループ内の自分の評価が気になった事がある	-.09	.27	.44
よくグループ仲間であとまって遊んだことがある	.20	-.04	.41
負荷量	23.65	13.36	9.33
累積負荷量	23.65	37.00	46.33

アルファ因子法 パリマックス回転

質疑応答

質問 (齊藤)：どうもありがとうございました。先生は学部長と臨床とを両方うまく分けてご研究なさって、また、学生の指導にも非常にこう熱心でおられるという風なことを伺いまして、まあ私もそんな風になれたら良いなという風に思っていました。論文の中身に関しまして、成る程なあと...エリクソンの理論を、実証的にやっていくという研究があるのだなということで、新しい知見を得さしてもらいました。

ギャングエイジがなくなった、何故ギャングエイジがなくなったのかということについては諸説あるわけですが、下の方に集団の同一性ってありますから、ここがその代わりになっているのかなと思います。そういうのと、もう一つはギャングエイジがなくなって後にずれこんだって言うことなんです、そのその説明って言うのが私には良くわかりません。まあ一つは75年と84年で何が違うのかって言うと、多分大学進学率が違って、職業的同一性、社会的同一性っていうのを22歳以降に決定するっていう風なことで、全体的にモラトリアムとしてずれ込んでいける状況にあったのではないかなと、いう風な感じがしました。

それから、同一性ってなんだろうかということがまあ一番の難しいところで、先生のやっている研究でもその同一性って何かという調査をしている。具体的な質問紙で言いますと、「何々のことを考

えている」。この考えているということは同一性なのか、それとも悩んでいるのか...平上さんは質問紙を全部「悩む」という風にやっていますね。その他の人は「考えている」という風にしてはいますが、悩んでいるって言うのと考えているっていうのはかなり違うと思うんですよね。悩んでいるって言うことが、実は同一性を探している過程のことでしょうけども、まあ考えている途中経過をとらえて同一性と考えるのか、あるいは考える段階を完全に完了してもう考えなくなったものをもって同一性と考えるのか、つまり、考え終わったのでそれについてはもはや考えなくなったときに初めて同一性が確立という風に言うのかと、この...質問の仕方でも微妙に変わってきてまして、それがこの同一性というものの実証的な研究の難しさというものに出てきているのではないかと思います。

ですから、精神分析で考えたことを実際にこうやって実証的にやるって言うことのまあ難しさといえますか、そういう風なものを、まあこれで聞きながら考え、尚且つまあ先生は精力的におやりになっていてすごいなと思いました。以上です。

回答：ありがとうございます。本当に私の悩んでいることをある程度そのまま言っていただいたような気がします。最初に戻りまして、ギャングエイジの問題ですが、私、明らかにニューマンの本を見た時に気付きました。ギャングエイジがやがては中学あたりの集団的同一性になるんだなあと、今中学一年にいじめ問題が多発しています。中学一年の所にいじめが一番多い人数が集まっています。統計的に調べますとそういう結果が出ているんですが、この結果はうまく説明できます。つまり、ギャングエイジをやってこないで中学校に入るからなんですよ。中学に入れば当然、体の変化とかもそのあたりで起きますので、精神的に成長していようがしてまいが、体の変化は訪れますから、そうすると改めて異性と言うものを意識し、その中で異性とどういう風に近づくのかと考えた時に、実はギャングエイジを経験している人としていない人では、相当コミュニケーション能力に差があるんですよ。

この様な実際の例については、私は臨床的にはいくつも出会っています。というのは、思春期の悩みは、大体ギャングエイジ経験していない子供ほど悩みが深いんですよ。ギャングエイジを経験している子どもは、自分を取り囲む環境をよく知っています。周りにどういう友達がいる、あそこの家はどういううちだとか、こっちの友達はどういう性格だとか、自分は運動神経がないけれど、彼は運動神経があるとか、自分は運動神経がなくてもそのかわり自分は音楽的能力が高いとか、そういう自他の違いはギャングエイジの子どもが遊びを経験する中で分かってゆくものなんですよ。そのかわり、そういうのを経験してこない子どもが中学校に入っていきますと、狭い自分の世界だけで、性的変化を背負い込むことになります。そうすると、自分の中で個人同一性をひとつまとめたくてもまとめることができない。あらためて集団的同一性でグループを作ってグループ的なまとまりが必要になる。という時期が今の子どもたちには出現しているんだなと思います。あの、中学校のクラブ活動などはまさに集団的同一性を獲得する場になっています。クラブ活動の中でギャングエイジを経験しているんだなとだいぶ思い知らされます。

このように、発達の後ろへ後ろへとずれ始めた。昔は20代の前半で本当は自我同一性っていうのは獲得しなければいけないことになっていた訳ですが、それが獲得できないで今や30歳くらいまでは自我同一性を求めてさまよってもいい時代になったんじゃないかっていうそういう学説も出てきている

ような状態であります。

それから、大変いいご指摘をいただきました。実はですね、高山さんがやった研究と平上さんの研究は、質問項目の語尾が違います。これは、平上さんが「自我同一性とは悩むことなんだ」と彼の論法で進めたので、「悩む」で統一したのですが、その結果、このような結果が得られたと言うわけです。今、斎藤先生に言っていただきましたように、まあ自我同一性って何なのかが問われるわけです。それは、そこに一つ危機、心理社会的な危機があって、その危機を乗り越えて私って何なんだろう、私ってなんでここにいないかならないんだろう、どうしてこの家で生活してるんだろうと、一通り悩んで、悩んでいるだけでは実は本当は自我同一性じゃないんですね。それを乗り越えて「俺は俺だよ、おれらしくやればいいんだよ」と言った時に、自我同一性が確立された、そういうことなんですね。ですから、悩んでいるだけじゃ駄目なんです。そこから先もうひとつ、それを乗り越えて、もう一段高い所へ上った時に、自我同一性が確立されたということになる訳ですね。そこところがまさにこの質問項目の中では、はっきりしていなかったものですからこれが結果的に分かれてきた理由なのだ言う所はあります。

(この研究所発表の後に、個人的に日向野先生より重要なお示唆をいただきました。多分個人的、集团的、社会的な質問が混在したのは、これらの項目の語尾が「悩む」という形でかかれたために、個人、集団、社会の区別よりも「いま悩んでいるかどうか」という問いかけの意味合いが強くなるためではないかということでした。これに対して職業的同一性の質問項目については、「将来……について悩む」と聞かれるので、「将来の悩み」として回答しているのではないかというご指摘です。確かにこう説明されると、今回の多くの疑問が説明可能になります。)

質問：漠然としたことなんですけども、先生は色々な大学の中で学生さんを見てらっしゃっていると聞いてなんですけども、今回のようなアイデンティティとかの問題を扱った時に、学生の雰囲気による調査結果の違いなどはあるのかなとおもいまして、その辺どうかなと、うかがってみたいと思います。

回答：あまり比較をするつもりはありませんけども、やはり大学によって学生の雰囲気によって違う印象を受けます。特にその、心理的発達の幼さと言いますかそのあたりは違いますよね。ある意味において、高学歴の中の人には、親の決められた路線を迷わずに来て、学校の成績はいいが、ちょっと幼い印象を持つ学生もいる(早期完了型)。もちろんそうした学生も、いずれどこかで自分の人生の生き方と直面化する時期が来て迷うんだらうなどは思いますし、そう思いながらそれぞれの学生を指導してきました。

質問：例えば、ギャングエイジをもう一度再生させようと言っても昔遊んだ広場はありません。また将来を考えた場合、これまで日本では終身雇用というものがありましたので分かりやすかったんですが、それが崩れた現在、これだけビジネスの世界が変わってきているときに、各年代において、それこそ30代でも40代でも50代でも我々でも職業的同一性というものを考えざるを得ない。そういう風な社会の変化があります。性役割においても、男性性、女性性と明確にとらえられていたものが、そうではなくなってきているとなった現代においての同一性というのは、たぶんエリクソンが考えた同一性と

はだいぶ変わってきている。ですので、実際の同一性、現在の変動しつつある社会との関係、これをきちっと考えていかないと、同一性そのものが方向を見失ってしまうのではないかとことがあるんじゃないでしょうか。

回答：まさにその通りです。たとえば私が見ていますと、我々が考えている性差、性役割の差については、今の学生さんとだいぶ意識が違うんですね。だから、尺度にしても、性役割同一性の項目だと我々が当然思っている項目でも、今の学生さんそう思わないなんていう可能性もあるんですね。おそらく今後、質問紙をやる際も、何かうまく昔の性役割と違う内容のものを作らざるを得ない。そういう時代になったんだと思います。

質問：非常に簡単なことなんですが、N = 161というのは、私たちの教えている学生さんなんだろうなと思ってずっと見ているのですが、先生こういう研究を通して、私たちはこれから、今目の前にいる学生に対して、こういう自己の問題に対してどういう風な教育をしていけばいいんだろうかと、先生の研究を通して得たご示唆などを教えていただければと思います。

回答：非常に大きなテーマで一口に色々なことを語るのは難しいかもしれませんが、私この発達課題に取り組んで気づくことは、年々学生さんの方がどんどん変わっている。それに応じて我々も変わらざるを得ないだろうなと思うことであります。

この話をした方が面白いかもしれませんが、私は2年生の臨床心理学概論の授業を教えています。教科書をそのまま渡して教科書の文章通りで授業をやってますと、大体教科書読んでこないし、教科書の何のページの何処に書いてあるのかも分からないままに、授業を聞いている学生がほとんどで、まあはっきり言って興味を失ってしまうのです。そして授業の間何もしないでただぼーっとして終わっちゃうという学生さんも多くなってきています。これを防ぐのに、私は教科書の内容をもう一度噛み砕いて、授業内容の図解をしたプリントを毎回渡しています。ですが、この前の教師に関する評価(授業評価アンケート調査)のときのアンケート用紙の記入欄に「左端の文章書き出しがそろってなくて、先生のプリントの作り方が下手だ」と書いてあったのですよ。それで私、次の授業時間に、「下手でごめんね、プリントをつくるのは、私大体、前の夜大体10時頃家に帰ってそこから作り始めて、出来上がるのは授業の日の午前2時頃になるのです。それだから左端の不揃いがあったりしたかもしれませんが、どうもすいませんでした」と授業の時に正直に学生にそう言いました。そうしたらそれを聞いていた中年の学生たちからものすごく反響が返って来まして「今の学生は甘やかされている。私たちが大学に通っていたときには絶対に教授からプリントなんかもらえなかった。教科書すらなかった授業も多かった。どんな思いしても教科書を読み砕くのが勉強なんじゃないか……そういう風な意見が次に帰ってきました。その意見を見て「あー、時代が変わっているんだよなあ…と、若い人たちはプリントもらうのが当たり前で、見た目がきれいに仕上がっているプリントをもらわないと、クレームをつける。でも、年配の人たちにとってはそうではなくて、さんざん苦労して勉強してきた人にとっては、プリントもらえただけでもありがたいと思っている。年代によってこの違いが出るのだなと感じた次第です。

以上で研究所の発表会を終わりにします。ご清聴有難うございました。